

平成14年度日本赤十字広島看護大学国際交流特別講演会

アンリ・デュナンと平和

日 時：平成15年5月29日 15:00~16:30

場 所：日本赤十字広島看護大学 講堂（ソフィアホール）

講演者：アンリ・デュナン博物館運営顧問

エーテル・コッハー女史

稲岡学長、教職員、学生の皆様方、今日ここにお招きいただきましたことを、フレニー・ヘーヘナートともども、大変嬉しく思っております。今回の旅行にご尽力くださいました皆様方に、厚く御礼申し上げます。

アッペンツェル赤十字会長、ハイデンのアンリ・デュナン博物館委員会から、くれぐれもよろしくとのことです。

（スライド1：ハイデン）

ハイデンは、スイスのアッペンツェル州にある保養地です。

赤十字の創立者、デュナンは晩年の23年間でここで過ごしました。彼は特に、穏やかで、新鮮な空気とコンスタンツ湖の眺めを好みました。

（スライド2：1900年頃の病院）

以前のハイデンの福祉病院です。デュナンは1892年5月から1910年10月までここで過ごしました。この建物の1階の小さな部屋は、後にデュナン記念館となりました。

8年前、この歴史的な建物は、もう病院として機能していなかったのですが、全体的に改修されることになっていました。アッペンツェル赤十字は、赤十字の創立者の全生涯をたどる博物館の創設に1階部分ほぼ全部を使える絶好の機会を得ました。光栄にも私が、その組織委員長となり、それゆえ、私は、赤十字創立前後のデュナンの生活に深く関わることになったのです。

（スライド3：ノートブック）

ハイデンで、デュナンは約100冊もの大きなノートブックに書き込みをしています。その中には、当時の社会的、政治的状況に対する意見、より良い世界を作るための提言や警告が書かれています。これらの貴重な文書は、彼の何千もの手紙と共にジュネ

ーブの大学図書館の文書庫に保管されています。

デュナンの長く、複雑な人生の、この期間に注目して、彼が先見の明のある平和主義者であったことをお話ししたいと思います。

1. アンリ・デュナンとYMCA

デュナンは二人の弟と二人の妹と共に、豊かで、信心深い家庭で、たいへん幸せな子供時代を過ごしました。尊敬される実業家であった父と、貴族の出である母は、ジュネーブの福音主義教会の信徒でした。ジュネーブの多くの進歩的な家庭と同様、彼らは偉大な宗教改革者カルヴァンの純粋な教義をゆがめていた国教会に反対の立場を取る熱心なカルヴァン派の新教徒でした。母親は貧しい人々のところを定期的に訪問していました。まじめで、大好きなお母さんといつも一緒だった長男のアンリは、よく町の恵まれない人々のところへ付いて行ったものでした。デュナンは幼い子供の頃から病気の人や不幸な人々とかわりをもっていたのです。

その後、デュナンは慈善同盟に加わり、自ら貧しく、不幸な人々にために働くようになりました。日曜日の午後、仲間と共に囚人を訪れ、プレゼントを届け、彼らのために聖書を読みました。

19歳の時、デュナンはジュネーブの有名な銀行に勤めることになりました。仕事の合間を縫って、毎週木曜日には、友人たちとデュナンの家で聖書の勉強会を続けました。

（スライド4：青年期のアンリ・デュナン）

18歳、デュナンはハンサムな青年でした。泳ぎがうまく、若い女性たちにとっては好ましいダンスの相手でした。

（スライド5：遠足）

自然を好んだアンリは、友人と山に出かけるのが

好きでした。

ハンサムでお金持ちの青年が、聖書を研究することを好むというのは、今では、変わっているように思われるかもしれませんが、当時のジュネーブでは自然なことでした。上流社会の若者がグループを作って、聖書を研究し、より良い世界を創ろうとしていたのです。なかでも、デュナンの「木曜会」が、一番活動的でした。これが、アンリ・デュナンが指導的役割を果たしたジュネーブのYMCA発足の基となったのです（YMCAの運動は、1884年に若い洋服生地屋のジョージ・ウィリアムズを中心に、イギリスで始まりました）。デュナンは使命感に燃えていました。銀行の出張で、パリやブリュッセルなどを訪れる際にはいつも、その地の青年キリスト教徒たちに会い、集会を重ね、宗教的な連携を深めました。デュナンは人々を結束する特異な才能を持っていました。彼の夢は、この世に楽園を創ることであり、その実現のために最善を尽くそうと思っていました。

デュナンは多くの国の多くの民族のキリスト教徒の仲間と文通しました。合衆国の同じ志を持つ人たちも含まれていました。彼の文通範囲は膨大なものでした。彼はフランス語と英語が出来ました。デュナンのこの熱意が世界同盟の組織化と強化を図る中心となったと、友人の一人が述べています。

（スライド6：YMCA世界同盟のロゴ）

1853年、デュナンはYMCAの世界同盟を創ることを提案し、その基盤作りの中心となりました。彼と彼のジュネーブの仲間のお蔭で、この大きな組織は、たいへんな反対があったにもかかわらず、ついにはバラバラな考えに基づいた民主的な組織となりました。

青春期から大人への10年間、デュナンは人類同胞主義に生き、若者たちを平和主義へと引きつけることに尽くしました。ちょうど皆さんと同じくらいの年齢の時に、彼がした努力とその成果は素晴らしいものでした。彼の熱意が叶い、ジュネーブにはYMCAの支部が出来、1855年8月にはヨーロッパとアメリカから多くの組織が参加して、世界大会が開かれ、本部はジュネーブに置かれることになりました。

2. アルジェリアでの投資、 ソルフェリーノ、赤十字

ここで、簡単に、デュナンの北アフリカへの関わりについてお話ししましょう。これが、後に、デュナンの人生に劇的な変化をもたらすことになるので

す。成功した国際的な実業家の息子として、彼は自分自身も事業に投資をしたいと思っていました。

（スライド7：製粉会社の株証券）

デュナンはヨーロッパに輸出する小麦の生産をしようと思い立ちました。彼は、今日の日本円では4億5千万円に相当する50万スイスフランを資本に、モン・ジェミラ製粉株式会社を作りました。しかしながらアルジェリアでのフランス政府の対応は遅々として進まず、事業に必要な土地と水の入手許可を得ることが出来ませんでした。失望したデュナンは、皇帝に直訴するしかないと思い至りました。ほかでもないナポレオン3世に直接訴えるのです。皇帝は大群を率いてイタリアの戦場にいました。イタリアを攻めてきたオーストリア軍と、サルジニア王を助けようとするナポレオン3世との戦いでした。デュナンは、緊急にナポレオンに会う必要がありました。アルプス山脈を越える大変な旅の後、1859年7月24日、ちょうど日が沈んだ頃、ソルフェリーノ近くのカスティリオーネにたどり着いたのです。

（スライド8：カスティリオーネ 勝利の凱旋）

双方、それぞれ15万人もの人々を巻き込んだ戦争の激戦地であったこの小さな郊外の町で、その夜、デュナンが見たものはどんなに恐ろしい光景だったことでしょうか。彼は負傷兵や死んでいく兵士たちの信じられないような悲惨な状況を、「ソルフェリーノの思い出」という有名な本のなかで、非常に写實的に描きました。

（スライド9：ソルフェリーノの思い出・貴重な初版本）

赤十字のルーツは記憶すべきこの夜にまで、さかのぼる事が出来ます。デュナンは戦争の悲惨な面に気づき、この後何日間も、その悲惨さを体験することになりました。

皆さまは、139年前に赤十字がどのようにして設立されたかをご存知のことと思います。

本の最後のページでデュナンは、戦場で、中立的な救護隊が、犠牲者の看護にあたるという国際協定の考えを述べました。ここにしばしば議論されるポイントがあります。その本の著者は、平和主義者だったのか、それともただ戦争の犠牲者だけを気にかけていたのかという議論です。後に、デュナン自身がこれに答えていますので、引用したいと思います。

“ソルフェリーノの思い出は、戦争の恐ろしさを、全人類に伝えるために書いたものです。”

デュナンは十分に現実的であり、戦争の合法性の問題に触れるには、まだ時期が熟していないと見通していました。若者の教育の目標も、支配者の政治

目的も、非暴力と平和の方向には向かっていませんでした。デュナンが軍隊に、有効な救助奉仕が欠けていることを立証したのは、すでに立派な功績でした。国際協定によって戦場で絶対的な自由を制限することを受け入れるよう軍隊の指導者に要求したことも、同様に大胆なことでした。

ジュネーブの著名な4人の指導者たち、軍人、医学、外科、法律の専門家とデュナンが一年半以内に、赤十字の基礎を築きました。1864年10月22日、その最初の国際会議で12か国が正式に調印しました（今日、参加国は190に達しています）。

この国際的な人道組織の誕生は大いに賞賛され、その発案者であるアンリ・デュナンはまるでスターのように、もてはやされました。

3. 破局と新しい生活

4年間、デュナンは本の執筆と赤十字の創立に没頭しました。アルジェリアの製粉会社の事を顧みず、あまりよく知らない仕事仲間にまかせきりでした。名声に判断力を失って、借金はいくらばかりでした。製粉会社も他の事業も倒産に追い込まれました。デュナンの家族と友人は莫大な額のお金を失いました。デュナンは名誉も財産も失ったのです。もはやジュネーブに住み続けることは出来ませんでした。カルヴァン主義の人々は、職業的な成功を神の恩恵だと考え、財政的な苦境を神の罰だとみなしていたからです。

デュナンはスイス人でしたが、フランスの市民でもありました。彼はパリに移り住みました。彼はそこに、すでにフランス赤十字協会を作っていたのです。しかしながら失望したジュネーブの投資者たちが、破産した製粉会社の会長を訴えました。アンリ・デュナンは計画的な詐欺で訴えられ、株主たちはすべての損害に対して彼を告訴する権利を得ました。デュナンは赤十字国際委員会を辞めざるを得ず、彼の名前はメンバーリストから抹消されました。同様にYMCAからも去ることになりました。彼はなぜ自分が訴えられるのかわかりませんでした。お金を儲けて困っている人たちを助けたかったのです。

今や、彼は生活のために働かなければなりません。貧窮生活を強いられるようになった後、デュナンが、実現しようとした計画の中で、平和がおもな目的であったところに注目しましょう。

（スライド10：国際的、普遍的ライブラリー）

1867年、デュナンは、100冊のすぐれた思想書を刊行する国際ライブラリーを創設しようとしていたガルジアという人と協力することになりました。

このタイトルはデュナンが書いたものです。

100冊の全集を、すべての町、地方、地域に売ることが、目的でした。これらの本は教育的であるばかりでなく、他の文化の技術や特性に賞賛の目を向けさせることも試みられています。「この国際的、普遍的ライブラリーは、国と国の間に良い関係をしつかりと築き、時至れば、人類に正義と平和の世界を築くことになるだろう。」とデュナンは述べました。この理想主義的な事業はプロイセン・フランス戦争の勃発によって、それまでとなりました。

デュナンはとても活動的になりました。彼は傷病兵とパリの市民のための中立的な避難所を組織しました。パリ包囲戦の間に、戦時下の市民の状況を改善するフランス福祉協会を作り、弱者や老人を保護したのです。1871年春、反抗する武装した市民たちは、政府軍にふみつぶされ、パリでの内乱は終わりました。デュナンは、人々が殺し合い、兵士が武器を持っていない女、子供を銃殺するという恐ろしい光景を目の当たりにしました。このことが条約の効力に対する彼の信念を、揺るがせました。「どんな協定が自暴自棄に陥っている人間の激情を静め、敵を打ち負かすよう命令されている兵士たちに野蛮な行為をさせないように出来るのだろうか。どうしたら内戦の虐殺を止めることが出来るのだろうか。」

デュナンのフランス福祉協会のメンバーは、私利私欲のない人々で、パリでの内乱の時には多くの建設的な仕事をしました。戦後、彼らはデュナンの秩序文明世界同盟に加わりました。この時の仲間には、後に最初のノーベル平和賞を分かち合うことになる平和主義者のフレデリック・パシーも含まれていました。このグループは、人々を救済したいとおもっていました。彼らは文明を高め、あらゆる可能な手段を用いて、政治的、社会的平和を維持しようとしていました。彼らは人々を教育して、戦争による裁判のない世界共同体のなかで暮らすことが出来るようにしたいと思いました。彼らは社会的、国際的正義のシステムを創ることが出来ると信じていたのです。

（スライド11：国際仲裁裁判所）

デュナンは彼の運動計画に、緊急事項だと思われる新しい課題を付け加えました。彼の秩序文明世界同盟は、次の戦争が勃発する前に国際仲裁裁判所を組織すべきでした。そのような制度は以前から、平和を愛する人々たちから望まれていました。しかし、デュナンはその組織に独創的なプランを持ち出しました。仲裁者の役割は、当事者によって決定されるべきではなく、国際的な会合によって、国家の集合、

つまり国際連合によってなされるべきだという考えです。国際連合が、敵に紛争の平和的解決を納得させるべきでした。人間が人間の真の敵であるはずがないというのがデュナンの確信でした。デュナンの覚書の中に次のような印象的な文章があります。

(スライド12：人間の真の敵)

「我々の真実の敵は、決して隣国というものではない。それは飢え、寒さ、悲惨、無知、日常の慣例、エゴイズム、迷信であり、公衆の健康と繁栄に対する無関心である。」

同盟のあらゆる主導、討論、回状、集会、デュナンの演説のどれも、戦時の捕虜と平時の囚人の処遇のための国際条約を生み出すには至りませんでした。しかしながら、デュナンの提案は影響力のある人々によって取り上げられ、後に国際的な決定がなされることになるのです。

デュナンと彼の仲間たちの先駆者的な仕事は、財政的に報われるものではありませんでした。同盟は自然消滅してしまいました。48歳で再び、デュナンは破滅してしまったのです。

今ではすっかり年若い、胃病と右手の湿疹に苦しむデュナンでした。この後12年間、彼は寒さと飢えに苦しみながら、屋根裏部屋や、公園で夜を明かすこともある放浪者だったのです。

(スライド14：デュナンが晩年の23年間を過ごした家)

デュナンはついに、ジュネーブから遠く離れたスイスの保養地、ハイデンに落ち着くことになりました。静かできれいな景色の中で、彼はゆっくりと回復していき、村の医者と教師の家族と交流するようになりました。二人とも、長く白いあごひげをはやし、擦り切れた服を着た印象的な外国人が誰かを見抜いていたのです。二人とも、赤十字の創立者であるデュナンをそっと見守り、援助の手を差し伸べました。

(スライド13：ウィルヘルム・ソンドレグー)

ハイデンの教師で、デュナンのために数多くの手紙やテキストをドイツ語に翻訳しました。ハイデンはスイスの中のドイツ語圏で、デュナンのドイツ語の知識はごく初歩的なものでした。

(スライド14：ヘルマン・アルテル博士)

ハイデンの医者で、病院長です。

1892年5月、アルテル博士の世話で、デュナンは彼の病院の病室に身を移し、一日たった3フランで治療と世話を受けることになりました。博士はデュナンが一月100フランしか使えないことを知ってい

たのです。債権者に付きまといわれるという恐怖に常におびえていた破産者のデュナンにとって、この病院に迎え入れられたことは、なによりの安らぎでした。

アステル博士の保護のもとで、デュナンは安心でした。平和と静寂と十分な健康的な食事がデュナンの健康を回復させました。

デュナンに関する多くのレポートが、赤十字の創立者デュナンがハイデンでの日々を安楽椅子に座って、訪問者たちに微笑みかけて過ごしていたという印象を与えていますが、これは間違っています。デュナンは依然として、徹底的で、骨身を惜しみませんでした。彼は「ソルフェリーノの思い出」の第7版を改訂し、自分で挿絵を入れた人間の歴史の記述にも取り組みました。また、自分の体験と赤十字の歴史も書き始めました。その上、赤十字の支部の創設に取り掛かり、赤十字の友人たちと活発に連絡を取り合っていました。しかしながら、ほとんどの人々は、デュナンはもう死んだものと思っていたのです。(スライド15：ドイツの週刊新聞記事)

ドイツの週間新聞記事が世界中にセンセーションを巻き起こしました。赤十字の生みの親であるデュナンの写真付きで、現在の居所が報道されたのです。様々な訪問者が訪れ、名誉、高価な贈り物などが次々ともたらされました。注目すべきは、熱心な平和主義者たちが彼の支援を求めてきたことでした。ヴィゼニエフスカ女王は、彼に国際軍縮婦人同盟の名誉総裁の職を申し出ました。アルフレッド・ノーベルに平和賞を設けるように働きかけたといわれるベルタ・フォン・ズットナー男爵夫人は、ハイデンまで出向きデュナンにオーストリア平和委員会による平和運動誌「武器を捨てよ！」に記事を書くように求めました。デュナンは快諾し、4編の熱烈な反戦アピールを送りました。その一部を引用したいと思います。

「戦争はまだなくなつてはいません。その形を変え、さらに恐ろしいものになっていると言えましょう。文明の名のもとに、作られているすべてのものが、戦争に役立っているのです。鉄道、飛行船、潜水艦、艦橋、写真術、電報、電話、光線電話などの素晴らしい発明が、戦時にも目覚ましい働きをすることでしょう。人間が作り出すもので、人間の死を早めるものでなかったり、より確実なものにしないものがあるでしょうか。人と人が殺しあうことになると、“慈悲深い、人道にかなった”と思われる人々が、身も心も打ち込んですばやく行動することになってしまうのです。」

デュナンは平和のための示威運動をするだけでは満足できませんでした。戦争を阻止する方策が必要でした。国際赤十字の真の創立者として名誉と名声を回復したデュナンは、勇気を得て、さらに別の大きなプロジェクトに取り掛かりました。

(スライド16：世界婦人同盟)

今度は平和を維持する組織でなければならず、デュナンはこれを婦人の手にゆだねることにしました。彼にとって、女性は社会の中で、保護的で、和解をはかる要素をもつものでしたが、一方、男性は権力と闘争に向かう傾向を示すものでした。生涯を通じて、困難な状況の中で、彼はこのことを見つめてきたのでした。家族の生存に確実に関わる力量があるのは母親たちでした。デュナンは家族を守り、女性の境遇を改善するための世界婦人同盟を創ろうとしました。彼の草案によると、その同盟は肌の色や、貧富に関わらず、すべての女性に開かれているものです。メンバーは年会費を支払わなければなりません、その額は、生活水準によって決まります。この資金はメンバーの財政的困窮時に使われます。

- 最小限の結婚時の準備金
- 最小限の子供たちの教育資金
- 病気、失業、老齢、一人になった時の最小限の年金

つまり、デュナンは自己負担の普遍的な社会保険を計画していたのです。この新しい制度の内部組織は、中央委員会、国別の協会とその支部からなる赤十字と同じようなものでした。デュナンは早期の実現を目指していました。

- 1893年にメンバーを指導する小委員会を備えた国際婦人連盟を創る
- 1896年にチューリッヒで最初の婦人の権利のための会議を開催し、国際間のコミュニケーションをはかり、平和主義のスローガンを普及することを目的とする。
- 世界中の婦人たちによる軍国主義と戦争反対運動をはじめ。

こうした手順で、すべての国で平等の権利と、政治的資格を手に入れることが女性にとって最良の方法であり、それが戦争防止につながるというのがデュナンの考えでした。

赤十字誕生の時と違って、デュナンには専門家の仲間がいませんでした。その上年をとりすぎていて、このプロジェクトをオピニオンリーダーたちに確信させる宣伝活動に出かけることが出来ませんでした。それゆえ、この婦人連盟に関する附属文書は、未だアンリ・デュナン文書庫のファイルの中に眠っ

たまなのです。

私はこのプロジェクトに非常に興味を引かれます。デュナンのすぐれた先見性を示していると思うのです。これは、社会の世界化 (social globalization) の最初の試みではないでしょうか。100年も前に、世界的な規模で最低限の社会基準を保障する国際的な組織が成功裡にスタートしていたら…ということ想像してみてください。今日まだ読み書きの出来ない人たちが多くいますが、おじいさんの世代の人たち (3世代前) がすでに教育を受けていたことになるでしょう。今日の南北間の社会的、経済的な格差も、今ほど深くはないでしょうし、国際間の相互理解もより良いものになっているでしょう。デュナンは1901年の第一回ノーベル平和賞を受けるのもっともふさわしい人であったと言えます。

このすぐれた平和活動家は近い将来に世界の平和が実現することにほとんど希望をもってはいませんでした。彼の最後の著作のひとつの題は「血まみれの将来」となっています。

その中で彼は20世紀における社会革命、侵略戦争と増えつづける残忍行為を予告しています。残念なことに、彼の見通しは正しかったのです。アンリ・デュナンは1910年、10月30日、82歳で亡くなりました。偉大な人道主義者の死は世界にとって大きな損失でした。

4. 赤十字と平和

(スライド17. 赤十字の旗)

赤十字と平和についてお話ししましょう。国際赤十字は、創立者が長い生涯の間に目撃してきたように、戦争の変化にあわせようとしてきましたが、戦争やその結果のひどさには追いつけませんでした。国際赤十字はどこであろうとも人が苦しんでいれば救うということを目的としています。生命と健康を守り、人間を尊敬し、国際協調と平和の維持を目指しています。平和への国際的風潮は、メンバーとボランティアの間に行き渡っています。世界平和が究極の目的ですが、戦争がなくなることは、現状では望むべくもありません。それゆえ被害をできるだけ少なくしなければなりません。紛争の真っ只中で友愛の思想を掲げ、暴力に反対し続けます。赤十字は平和主義ではなく、平和を回復する運動なのです。厳密に中立でなければなりません。そうでなければ交戦国の傷病兵や捕虜たちへの道は閉ざされてしまうでしょう。この言葉で私の講演を終わりにしたいと思います。